

終始不穏なりオ・オリン（パラリン）ピック

平和統一 NEWS No. 96 (2016/9月号)

渡辺 久義

まもなく始まるリオ・パラリンピックで、まさかロシアの全選手が出場禁止になるとは、当のロシアをはじめ、世界中が予想しなかつただろう。これは明らかに、選手でなく、ロシアに対する懲罰である。8/7「インデペンデント」紙の説明によると、そもそも IOC (国際オリンピック委員会) は、選手の一括禁止には一貫して反対であり、その圧力にもかかわらず、IPC (国際パラリンピック委) は、ぎりぎりになってその非常識な決断を発表した。しかも IOC は、その唯一の根拠になっている「マクラーレン報告」という怪文書を、相手にしていなかった。この報告書の正体については、「ロシアのドーピングに対する暴力的裁定」<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/160815.pdf> をご覧願いたい。マクラーレン教授の主張するような、例えば、尿サンプル瓶の中身の入れ替えなど起こり得ないことがわかる。

(NHK ニュースは、サンプルの置かれた部屋に、隣室に通ずる穴があったなどと図入りで説明していた。)

IOC と IPC の関係はわからないが、IPC は IOC を無視することができるのであろう。こういう狂気じみたことは、いわゆるグローバル・エリート (NWO) による支配構造の中では珍しくない。例えば、トニー・ブレア元英首相が、子供の人権団体「セイブ・ザ・チルドレン」から功労賞を授与された。この団体の責任者たちは、どうして決まったか知らなかった。世間は、ブレアが、イラクにおける大量子供殺しの張本人であることを知っていた。これは団体の組織を超えて、トップ (ビッグブラザー、お上) と通ずる誰かがいるということである。<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/141130.pdf> など、いくつかの記事参照。

これらの事件に共通するのは、誰か目に見えない権力者の「どうだ、我々が世界を支配していることがわかったか」という暴力団的示威である。これは初めから、カネがらみの計画であろう。かつて政府の中枢にいたポール・クレイグ・ロバーツでさえ、どうしてアメリカが EU を思い通りに動かせるのかわからず、自分の博士論文の主査だった高位の事情通に聞いてみた。答えは「カネだよ」ということだった。

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/160801.pdf>

今度のオリンピックでショッキングだったのは、アメリカの水泳選手の、ロシア選手に対す

る公然たる侮辱であった。詳細は「相手がロシアならマナーの悪さはゆるされる？——オリンピックを汚す米チーム」<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/160819.pdf>を読んでいただきたいが、この侮辱を当然だとして公然と支持したのが、最多金メダルのフェルプス選手だった。なぜだろう？ これは買収ではないとしても、国家方針に彼が協力したものと考えるべきだろう。普通なら、大先輩として年下の選手をたしなめてしかるべきである。いずれにせよ、スポーツに政治が持ちこまれていることは間違いない。

「IOC が、これほど明らかにスポーツマンシップを欠くだけでなく、繊細さも洗練も欠く者に対して、断固たる処置を取る勇気をもたなかったことは、悲しく、かつ現実の悲劇である」と、この論文へのあるコメントが言っている。IOC は明らかに「暴力団」を怖がっている。

それより更に驚いたのは、数人の英雄といってよい米水泳選手が、タクシーで選手村に帰る途上で、強盗に遭ってカネを盗られたとウソをついた事件である。これは普通に考えて動機が納得できない。彼らがカネに困っていたとは考えられない。軽い気持ちのいたずらとも考えられない。これも買収ではなくとも、何らかの教唆によって国家に協力したものであろう。アメリカは、現在、戦争を構えている相手のロシア（プーチン）の印象を落とすために、あらゆる馬鹿げた手段を用いている。彼らは同様に、失脚に追い込もうとしているブラジルのジルマ・ルセフ大統領の印象を落とすために、あらゆる手段を用いようとする。ピストル強盗に遭ったのが有名選手であれば、ブラジルの信用を傷つけるには効果的である。これはアメリカの伝統的手段である「ニセ旗」の一種である。

ところがこれは、あまりにもあつけなく、いわゆる狂言であることがばれてしまった。そうなる可能性を彼らは考えていなかったのだろう。「最高レベルの役人でさえあからさまなウソをつき、どんな潜在的結果をも全く恐れないとしたら、これらの“英雄的水泳選手”を含めた、ほとんどのアメリカ市民から、人はどんな振舞いを予想できるだろうか？」（「現代アメリカ：ウソの帝国」<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/160824.pdf>）

アメリカの水泳選手たちは、政府のやり方を見倣って同じようにウソをつき、政府が失態を演ずるように失態を演じ、おそらくその厚顔無恥をも見倣った。これは、韓国を憎む日本人（逆でもよい）が、相手を陥れようとして、相手国へ行って、このような狂言を働いたと考えればよい。ばれたときどうするのか？ そのときは何倍もの「倍返し」として、自分（自国）が信用を失い、世界の軽蔑の的となる。今のアメリカがまさにそういう状態にある。

日本のメディアは、もうそろそろ、アメリカのウソに付き合っ**てあげるのをやめるべき**である。そうしないと、読者に愛想をつかれるだけでなく、国際的にも馬鹿にされるだろう。